

機関番号：10103

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02781

研究課題名(和文)中国語学習者を対象に発信力の向上を目指したスピーキングテストの開発

研究課題名(英文)Developing Chinese Speaking test for Japanese University Student

研究代表者

曲 明 (Qu, Ming)

室蘭工業大学・工学研究科・准教授

研究者番号：60727064

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は中国語スピーキングテストの開発を目的として、日本人大学生の中国語学習者向けのペアスピーキングテストの作成及びその妥当性を検証するものである。具体的には二つのことを行った。日本人大学生の中国語学習者の言語習熟度レベルに適合し、且つ教育現場で使いやすいペアスピーキングテスト用の評価尺度を開発した。対面式スピーキングテストとして最も使われているインタビューテストと比較して、作成したペアスピーキングテストの妥当性を検証した。以上の研究と実践を通して、日本の高等教育機関における中国語スピーキング能力の育成及びその学習の支援を充実させたいと考える。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to investigate the validity of a Chinese paired speaking test. Data was collected from the students who learn Chinese language in Japanese Universities. Examinees took two types of speaking test- an interview test, and a paired speaking test. Comparative studies were conducted on the speech sample and test scores. Different proficiency levels examinees were found to perform differently across test types on their speech sample. Regarding test score, t-test results indicated that performance levels on fluency and communication skills in these two tests could be considered to be different. These findings have practical implications for future test design and the use of paired discussions as a speaking test format. Since the test is designed to simulate pair/group discussions that students might have in the classroom and real world, the paired speaking test has the potential of positive wash back for communicative classrooms.

研究分野：応用言語学、言語テスト、中国語教育

キーワード：中国語スピーキングテスト

1．研究開始当初の背景

近年日本では、外国語教育の目標は実践的コミュニケーション能力の育成に重点が置かれている。外国語教育現場では、学習者のスピーキング能力の育成およびその学習の支援が教育の急務になっていると言っても過言ではない。指導と評価の一体化を図るため、スピーキング教育の指導が行われればその評価も行わなければいけない。また、テストの波及効果を考えると、実践的なコミュニケーション能力を育成するためには、コミュニカティブなスピーキングテストを行うことが効果的であると考えられる。しかし、日本の中国語教育分野ではまだスピーキングテストに関する研究がない。

言語テスト分野では、20 世紀 90 年代よりタスク中心の言語教育の発展により、受験者に現実社会に起こりうるコミュニケーション場面を実際に実行することを要求するパフォーマンス評価への関心が高まってきた。現在一番多く行われている対面式のスピーキングテストはインタビューテストである。そこで、本研究では、中国語スピーキングテストの多様化を目標にして、学習者同士の話し合いを評価するペアスピーキングテスト（paired speaking test、以下ペアテストと略す）の開発及びその妥当性の検証を行う。

2．研究目的

本研究は中国語スピーキングテストの開発を目的として、日本人大学生の中国語学習者（中国語を専攻している学生）向けのペアテストの作成及びその妥当性を検証するものである。具体的には下記二つのことを行おうと考える。日本人大学生の中国語学習者の言語習熟度レベルに適合し、且つ教育現場で使いやすいペアテスト用の評価尺度を開発する。

スピーキングテストの分野で最も使われているインタビューテストと比較することにより、作成したペアテストの妥当性を検証する。以上の研究と実践を通して、日本の高等教育

機関における中国語スピーキング能力の育成及びその学習の支援を充実させたいと考える。

3．研究方法

前節で述べたように、本研究は日本人大学生の中国語学習者向けのペアスピーキングテストの評価尺度の作成とペアテストの妥当性の検証と二部分からなる。

評価尺度の作成に当たり、以下三つの段階を踏んで研究を行う。言語能力、中国語のスピーキング能力とは何かについて理論的な考察を行う。ペアテストを実施し、学習者の発話にスピーキング能力要素の現れ方について記述する。暫定版及び完成版評価尺度の作成である。ペアテストの妥当性の検証を行うためには二つのステップがある、すなわち、日本人大学生の中国語学習者を対象にインタビューテストを行う。ペアテストとインタビューテストの得点および発話を比較することにより、ペアテストの妥当性を検証する。

4．研究成果

2015 年度は学内の倫理審査委員会にて個人情報保護等に係る審査に通過した後、以下の研究活動を行った。まずスピーキングテストを行い、データを収集した、その後ペアテストの評価尺度を作成した。具体的には、中国語を専攻する日本人大学生 35 人を対象に、期末のスピーキングテストとして、インタビューテストとペアテストを両方行った。言語産出活動は、被験者の同意を得た上で録音、録画した。その後、ペアのスピーキングテストの評価尺度を以下 4 つのステップを踏み開発した。スピーキングテスト、評価尺度の種類、尺度開発するアプローチの方法論について理論的な考察を行った。日本国内外の中国語スピーキングテスト（HSKK（HSK のスピーキングテスト）、中国語検定試験二次試験、ATSC（Automated Test of Spoken Chinese）、C test（Chinese proficiency test）、

KEPT(Kanda English Proficiency Test) の評価尺度をレビューし、日本人大学生の中国語学習者に相応しい評価尺度の下位項目及び評価観点を決めた。この段階で出来た評価項目及び評価観点を日本の高等教育機関の中国語教育目標と照らし合わせながら暫定的な評価尺度を作った。暫定的な評価尺度を用い、被験者たちのスピーキングテストでの言語パフォーマンスを教育現場で中国語を教える教員に評価してもらい、アンケート、インタビュー調査によって、評価尺度の妥当性を検証した。その結果、多くの教員がこの暫定的な評価尺度は日本人大学生の中国語スピーキング能力を測定できるとコメントした。また、作成した評価尺度の能力記述文、とりわけ1点と5点の記述文は調整する必要があることがわかった。評価者トレーニングの重要性も確認することができた。

2016年度も二つのことを取り込んだ。一つは前年度に引き続きペアスピーキングテストのデータ収集であり、もう一つはペアスピーキングテストの妥当性を検証することであった。2016年度の前半では、中級中国語学習者50人を対象に、インタビューテストとペアスピーキングテストを行った。スピーキングテストの会話データは被験者たちの同意を得た上で、録音した。その後、テストの採点、会話データの文字起こしを行った。後半では、ペアスピーキングテストの妥当性の検証を行った。両テストの形式の違いが受験者の得点にどのような影響を与えているのかを、両テストの総合得点及び下位項目(発音、語彙、文法、流暢さ、コミュニケーションスキル)得点の相関分析とt検定を行い、検証した。相関分析の結果では、すべての項目において有意な相関が見られた。総合得点と発音では両テストの得点には高い相関が見られたが、他の下位項目では中程度の相関が見られた。また、t検定を行ったところ、発音、語彙、文法の3項

目においては、両テストの得点の平均に有意差がなかった。しかし、流暢さ項目では、インタビューテストよりペアテストの方の平均点が有意に高かった。コミュニケーションスキル項目においては、インタビューテストよりペアテストの方の平均点が有意に低かったことが分かった。この結果から、上記2項目においては、スピーキングテストの形式の違いによって難易度が異なっていたと考えられる。

2017年度は前年度に引き続き、ペアテストの妥当性の検証を行った。具体的には、スピーキングテストの形式の違いが受験者たちの発話に及ぼす影響を検証した。2015、2016年度で収集したデータを用いて、両テストの形式の違いが受験者の発話量、ターンの数、ターンの長さに及ぼす影響を検証した。その結果、成績の上位群においては、テストの形式の違いは発話量に影響しないが、ターンの数に影響したことが分かった。インタビューテストより、ペアテストのターンの数が有意に多かった。それと対照的に、成績の下位群においては、スピーキングテストの形式の違いは発話量、ターンの数、ターンの長さに影響しないことが分かった。また、三年間のまとめとして、日本国内外の利害関係の高い(high stakes)中国語スピーキングテストの種類、タスクの具体例、実施方法、実施手順、評価方法、評価尺度をまとめ、それに基づいて、一般の教育現場でスピーキングテストの問題を作成する際の考え方や理論を整理し、論文にまとめ上げた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

1. 「中国語スピーキングテスト」『コンピュータ適応型中国語テストの開発と検証』曲明 平成 27 年度～平成 29 年度科学研究費

- (課題番号 15H03225) 報告書 130~148, 2018年3月
2. Comparative Study on the Motivations for Chinese Language Learning in the UK and Japan- Focusing on the Influence of Mass Media Portrayals of China. Ming Qu.12th International Conference on Teaching Chinese as a Second Language Conference book.1~13. December 2017
 3. Peer Assessment for Testing Classroom Chinese Speaking in a Japanese University: Correlations and Attitudes. Ming Qu & Margit Krause - Ono. The Japan Association for Language Teaching Gunma chapter Annual journal. 24~35. December 2016
 4. 「日本人大学生の中国語学習者を対象にしたスピーキングテストの評価尺度の開発」
曲明 『外国語教育研究』No19. 37~56. 外国語教育学会. 2016年8月
 5. 「日本人大学生中国語学習者のスピーキングの特徴 - 中国語母語話者との比較から」
曲明 『中国語教育』第13号. 150~169. 中国語教育学会. 2015年3月
- [学会発表](計11件)
1. A Comparative Study on the Influence of Mass Media Portrayal of China in Japan and UK -Focusing on the Motivation of Chinese Language Learning. Ming Qu. The Society for Intercultural Education, Training, and Research2017. October 2017. Sofia University, Japan.
 2. Comparing a Paired Test and an Interview Test-How does the Task Affect oral performance. Ming Qu. Temple University Japan Colloquium. February 2017. Temple University.
 3. A Chinese Language Program Evaluation at a Japanese University- Focusing on the Intercultural Competence. Ming Qu. Asia-Pacific Consortium on Teaching Chinese as an International Language. October2017.Yonsei University, Korea.
 4. An Evaluation of a Chinese Program At a Japanese university. Ming Qu. Japan Language Testing Association 2017. September 2017.Aizu University.
 5. 汉语交际型口语考试评分标准的探讨.
曲明 中国語教育学会第16回目全国大会 2016年6月 日本大学
 6. Developing a Rating Scale to Assess Chinese Speaking Skills of Japanese University Students. Ming Qu. Useful Assessment and Evaluation in Language Education. March 2016. Georgetown University, USA.
 7. Applying the CEFR across Language Curricula: German and Chinese. Margit Krause-Ono & Ming Qu.3rd Conference on Critical, Constructive assessment of the CEFR-based language teaching in Japan and beyond. March 2016. Osaka University
 8. Peer Assessment for Testing Classroom Chinese Speaking in a Japanese University: Correlations and Attitudes. Ming Qu. September, 2016. The Japan Association for Language Teaching. Gunma University.
 9. Using the Can-do list as a Checklist for a Short-term Chinese Study in China. Ming Qu.2nd Conference on Critical, Constructive assessment of the CEFR.June2015.Tokai University.
 10. 「日本人大学生の中国語学習者を対象にしたスピーキングテストの評価尺度の

開発」曲明 2015 年 10 月 東京外国語
大学 外国語教育学会全国大会

11. Learner Centered Chinese language
Learning Using a Can Do List for
Self-assessment of Chinese speaking
Ability. Ming Qu .The Japan
Association for Language Teaching.
November 2015. Shizuoka City,
Shizuoka Prefecture.

〔図書〕(計 1 件)

1. Critical, Constructive Assessment of
CEFR-informed Language Teaching in
Japan and Beyond. Edited by Fergus
O'Dwyer. Cambridge University Press.
September 2017. (分担, P300-P311)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

曲 明 (Qu, Ming)

室蘭工業大学・工学研究科・准教授

研究者番号 : 60727064